



## 「コンクール」読書 ―作品と自分との対話―

夏休み前の七月に出品した読書感想文の内三名の作品が入賞しました。

感想文は、作品と自分との対話です。本を読んだ際の、「対話」を楽しむきっかけにしてほしいと思います。

### 新潟県課題図書読書感想文コンクール

優秀賞 五年 男子  
優良賞 五年 男子  
佳作 五年 女子

※今回は、優秀・優良賞の二編を掲載します。

## 五年 男子

「人は人。考え方なんてそれぞれなんだし。余計なことせずに、関わらないであげたらいいのに。」そのほうが親切だよね！」

学校に来られなくなった大林君に、同じクラスの女の子たちがつぶやく言葉が、自然に耳の中に入る。かえって、徹底的にやらなければ気が済まない宮子の言葉が、ぼくにっては耳に突き刺さる。実際、ぼくのクラスにも趣味も考え方も違う友達がたくさんいる。グループ活動で一緒に作業をする時、「そうだね。」と言いつつ、自分の心の中では、「それぞれ」を大事にあまり関わらない付き合い方をしている。

文香の友達の卯沙が、プレゼントに選んだ物の色が灰色だった時、なんて気が利かないと思った。でも、友達の文香の「はっ

## 五年 男子

青色が好きだ。物事が始まる感じがするし、元気で明るいイメージがあるからだ。でも、大林君の部屋の灰色のカーテンは、彼の「時間を前に進めたい」心の色を映し出していると思う。「学校に行きたい」けど、「昔の教科書をめくって学校を思い出す」2つの心の色が混じり合った世界の中にいると思う。

でも、やっぱり灰色は青色の反対に位置する色で、ぼくにっては、もやもやとした「はつきりしないもの」でしかなかった。そのぼくの心をどきどきとさせたのは、文香の友達の卯沙が何気なく言った言葉だ。「灰色って、いろんな色が混ざって見える」だ。

この物語に出てくる、好きな歴史を好きなだけのめり込む文香の母の色きりしない「性格を、ちゃんと分かっているんだな」と感心した。これが親友だ。

「灰色って、いろんな色が混ざって見える」ぼくの中には全くなかった考え方だ。青は元気で明るい色で、灰色は反対。気が付かない内に、物事や人を「合う」「合わない」で分けていたのかと気付かされた。ピンク色で何でも統一する文香の友達の卯沙は、人の「色」が見える女の子だと思った。決して、他人の好みを否定はしないけど、一緒になつて受け入れようと思わない。自分の持つている心と重なって見えてきた。反対に、何でも「はつきり」させたい宮子みたいな人は苦手だ。一緒にいると、自分では納得しないのに同じ「色」に染まっ

ていく気がするからだ。確かに、ぼくたちの身の姿は赤紫だ。好きなことも仕事もバランスの取れた生き方をしていると思う。宮子のような、自分が常に正しいと考えや行動する、ド直球タイプの人が多くいる感じがする。また、回りの全てをピンク色で統一する卯沙。この赤を白で薄めた色は、自分を白で薄めているように、自分を表に出さずにいる姿を感じる。

ぼくたちの身の回りには、無数の「色」を持つ人間がたくさんいる。そして、混ざり合うことで、世の中は様々な色を創り上げていくんだと思った。もちろん、宮子の取り巻きの女の子たちにも違う色がある。でも、決定的に違うのは、「自分の色」を他の人と混ぜ合わせようとしないことだ。

「人は人。考え方なんてそれぞれなんだし。余計なことせずに、関わらないであげたらいいのに。」そのほうが親切だよね！」

回りに、薄い色から濃い色、そして、温かい色から冷たい色まで、様々な「色」を感じさせる人間がいる。ぼくは、そんな人たちと、ちよつとずつ混ざり合ったり、一人になつたりしながら、自分の色を創っていききたい。宮子の取り巻きの女の子たちと似ているぼくだけど、少しずつこすり合わせながら、自分色を大切に育てていきたい。ぼくは、自分の考えをはつきり言うことは苦手だ。ぼくの学校では、学校全体で行うスピーチタイムという活動がある。その時その時のテーマに合わせて、自分の考えを発表し、感想を相手に伝える活動だ。以前、自分の発表したスピーチ内容について、他の人から、「少し、テーマと合っていないかも。」と言われたことがあった。思ったこと

いであげたらいいのに。そのほうが親切だよね！」

ぼくにもそんな面もある。その場が楽だからだ。確かに「同じ色の人」だけが各々集まれば、きつと見た目はきれいに見えるだろう。でも、人と人とのつながりがなければ、社会は成立しない。もちろん灰色の（決められない）ままではダメだ。そこに、青やピンク等の様々な色をもつ人たちと「関わっていきなこと」がとても大切だと思う。

ぼくは、スポーツ少年団のバレーボールチームに所属している。練習や試合で、自分のイメージ通りにボールがつかなくていくと気分は最高になる。逆なら、「合わない」と、イライラが表情に出る。本当は、合わない時こそ「どこで合わないのか」「どのように合わせていけばいいのか」、まず自分

からコミュニケーションをとらなければいけないのに。原因は、相手ではなく、自分の心の中の「色の混ざり方」ができていないことなんだと思う。

この本を読み始めると、どんなページをめくっている自分に気が付いた。「ちゃんとした手紙」の正解を早く知れたかったのかもしれない。でも、人と人との付き合い方は、ドリルの答え合わせとは違う。自分の中にあるはずだ。バレーボールのセッターは縁の下の方力持ちだ。これからも、仲間の色を出し合い混ざり合い、様々な色を創り合える、パレット役ができるようにしていきたい。



を気楽に発表したぼくは、「今度は！」とは思わずに、「まあ、いいか。」と納得してしまい、それ以来、自分の考えをさらに言わなくなつたような気がする。

「大林くんへの手紙」は、自分でも信じられないくらい一気に読み上げた。なぜだろうか？一人の友達のために、こうも

考え方の違う子供たちが本気になって考え合っている中に、ぼくも入っていたのかもしれない。「大林くんへの手紙」は、ぼくの心のスイッチを押してくれた。今度は、ぼくの現実の友達関係の中で試していきたい。

## コンクール（絵画）

ふるさ愛護ポスター  
金賞 6年 女子



加茂市のよさを一枚の絵の中に表現する、「ふるさと愛護ポスター」コンクールに見事入選しました。